

< 呆・き・れ・た ! >

昨年夏、長崎県の町村議長会研修会に招かれた筑波大教授中川八洋氏の講演内容を覚えておられるだろうか。講演は「衰退する日本—国家再生の道を探る—」と題し、その内容は「長崎の平和宣言は正気と思えない」「戦争をしない国は衰退する」等の戦争肯定と、「少子化で日本は滅びる。男は2号、3号を持って子どもを生ませよ」「女は40過ぎたら肉のかたまり」「男女は平等ではない」「セクハラ裁判をしているのはみんな共産党だ」等の女性蔑視・偏向発言など、国立大教授の講演とは思えない品位のないものであったという。長崎の女性たちはこの発言内容を責任ある地位を持つ学者による重大なセクシャル・ハラスメントととらえ、中川氏と筑波大学関係者、文部省、主催者へと多くの抗議文を投入した。(203号、204号掲載)

このたび私たちが入手した「筑波大学新聞」によると、中川氏の発言は昨年11月17日、国際総合学類職員会議において取り上げられており、「発言は文部省におけるセクシャル・ハラスメントの防止案に関する規定の定義に照らして、セクハラにあたる。大学人として品位と良識に欠ける」とする批准決議が採択されていた。

ところが である。

中川氏はこれを、「根拠のない誹りぼう中傷であり、名誉毀損に当る」として、学類長である教授を告訴したうえ、学群長に対しては、「決議が成立したのは学群長の職場放棄であり、これがなければ名誉毀損もなかった」として損害賠償請求の民事訴訟を起こしたという。

私たちは呆れ返ってしまった。告訴したり損害賠償を請求したいのは長崎の当事者のほうではないか。

この件に関しては筑波大学内にも波紋がひろがり「支援する会」が2月中旬に設立される見込みだというが、ばってん・うーまんの会も直ちに支援体制をとって他の女性団体、個人にこのニュースを広げており、また中川氏の講演内容を録音したテープの行方を再度主催者に迫る必要もあり、事務局はバワフルに全開中です。

皆さんの支援を待っています！

1. 昨年8月27日、諫早市の市民文化会館で中川教授の講演を聞いた方
2. 抗議文、支援文をだしてもいい方

*事務局()にお名前と住所か電話番号を下さい。

ハノイで女性博物館を見学

門 更月、葛西よう子

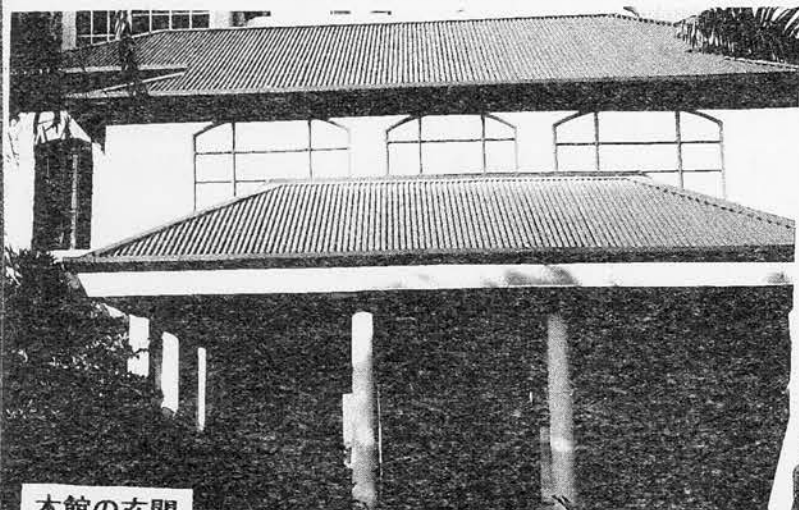


女性博物館の入口

昨春のハノイ訪問で「感動した」と話してくれた「女性博物館」がある。ぜひ行きたいとホーチミン旧居など訪れた午後皆で街の中心部にある博物館へと向かった。

大きいが雑然としていた「戦争博物館」とは違って、こじんまりとした3階建ての建物は良くととのった展示がされていた。ベトナムの女の歴史が服装、暮らし方、生産や学習等紹介され、現在の女性の地位やあり方が詳細なデータと共に展示されていた。

遠い昔の中国からの独立運動以来の女性の働き、とくにフランスからの、そして1940年代の進駐して来た日本軍からの独立のため働いた女性達の姿が数々の写真や絵で示されていた。圧巻はベトナム戦争時になされた女性の働き、そして息子を夫を奪われた女性たちの悲しみを語る写真群だった。「平和なくして人権なし」の言葉を噛みしめると共に、女性の働きをきちんと評価する国立博物館がうらやましい私たち2人だった。



本館の玄関



99 12 29 一階中央にたつシンボルとしての女性像



まだ「卒業証書の介添えは女性」ですか？

門 更月

今年もまた卒業式の季節がやって来た。学校長が卒業証書をわたす傍らで、その補助（介添え）を行う人として、あなたはどのような人をイメージするだろうか。

昨年から高校生の求人票が男女別でなくなったことは周知のことだが、それは職場における男女平等を進めるために、女男という性別で分けないで雇用していこうとするものである。長い間職業にも女の仕事、男の仕事という固定観念があり、それが女性の社会進出を阻んできた。その固定観念をジェンダーという。ジェンダーを日本語に訳すと「社会的・文化的につくられた性差」となるが、「男は外で仕事、女は内で家事・育児」という性的役割分担もそうだし、いわゆる「男らしさ、女らしさ」もジェンダーとして私たちの意識にしみついていっているものである。このジェンダーをとりはらわなければ男女平等は実現しないということが、最近やっと日本でも広く認識されるようになってきた。

そこで「介添え」である。なぜかこの仕事は多くの学校で長い間女性が担当してきた。女性がふさわしいという理由で。その根拠としては女性のもつ華やかさや優美さが舞台でははれるというものが多かったように思う。「女性というものは華やかである」というのがジェンダーによるすり込みなのである。女性にもいろいろな個性の人がいるのに、「女は」というくくりかたをしてしまう。もちろんそれは男性にもいえよう。「女だから」「男だから」で分けない教育こそが、今ジェンダー・フリーの教育として求められている。

加えて、そもそも「介添え」に華やかさや優美さが必要なのだろうか。ただ間違いなく証書を学校長にわたすことが仕事なのだから、当然男性もできることで、女性に固定される必要はない。また華やかさや優美さというのはかなり主観的なもので、職員のだれかをその観点から選ぶとすれば、これは非常に問題になるだろう。

いずれにしてもこの「介添え」の仕事は「あの人に」と指名するのではなく、学年主任とか教頭とか、その他卒業生に一番近い人である方が望ましいのではなかろうか。

そして何よりも、「介添え」というほとんど意味のない前時代的な係は、廃止の方向で考えるべきではないかと思う。

「学校現場の教職員はジェンダーとかジェンダーフリーとか、まだ知らんとよ」

前ページの文を書いた彼女がふか〜い溜め息をついた。今年もまた、校長の介添え役に役割分担意識がぬけない現場で、管理職やマッチョな男たち、変わりきれない女、組合の人達を前に、胃の痛くなるような議論を繰り広げている。国の「基本法」もできた、県の新行動計画も3月にできる。我が長崎市は男女共同参画宣言都市でもある。あ〜早く学校の先生たちを集めて、男女共同参画社会の学習会を開いてくれえー。もしかしたら、これで最近多発の傾向にある教え子へのセクハラ事件も少しは減るのではないか。教育に携わる人達こそ、男女共同参画社会基本法の内容と解釈についてきちんと学習する必要があると思う。



参加しました、福岡で開催された

”女性に対する暴力”被害女性支援システム をつくろう・フォーラムへ

(主催：同上実行委員会 共催：福岡県女性総合センター・あすばる)

さまざまな暴力を受けている女性たちに必要な情報や支援が届くように、医療機関や福祉関係者、弁護士が一堂に会して、勇気を出して一機関を訪れた被害者への支援がそこでブツンと切れないような支援システムをつくりあげようということであった。婦人相談員の会員から誘われたのだが、被害女性の立場にたってこんなフォーラムを作り上げた彼女らの情熱に感動した。男性支配の社会の下で、手を伸ばしあって女が女を救いあっていく様子は本当に素晴らしい。



【ばってん・うーまんの会 会報：年間購読料 1500円(送料共)】